

先週の回答



「知らんのか？ 慎太郎刈りを」
 「知りません。何ですか？ 慎太郎という人が田んぼで稲でも刈ったんですか？」
 「1955（昭和30）年、第34回芥川をとった『太陽の季節』は？」
 「聞いたことがあります。それが何か？」
 「それを書いたのが石原慎太郎だ」
 「あの、先の先のその前の都知事をやった？」
 「彗星のように文壇にデビューしただけでなく、それまでの若者のスタイルを一変させた。ま、カリスマといえるだろう。彼の髪型、刈り上げて額に垂らした慎太郎カットが一世を風靡。ネコも杓子も慎太郎カットにアロハシャツ。鼻はア

グラをかいて、ずんぐりむっくりの体型でも、頭は慎太郎カットが風を切って歩いていたもんだ」
 「おじいちゃんも？ したの」
 「時代の波に乗らんとな」
 「したんだ。その顔で慎太郎カットを。石原慎太郎って今でも背が高いよね」
 「当時は、弟の裕次郎と兄弟二人とも身長が180センチ。脚が長くて、女のこの憧れの的だった」
 「その上、芥川賞をとる文学青年だったんだ」
 「その点はおじいちゃんは懐疑的だった・・・」
 「どうして？」
 「その芥川賞の選考委員だった一人が、後で語っていた『あの太陽の季節という作品は、わたしにはまったくわからな

った。ただ、わからないと言うと時代おくれと思われるのが恐くて一票を投じたが、今考えると、文学性はゼロだと思っ」って」
 「でも、その後にも文学作品を書いたんでしよう？」
 「文学的な価値のあるモノは一作もなかったなあ。で、彼は政界に乗り出したんだ」
 「自分でもわかっていったのかなあ・・・その辺のところを」
 「国会議員に立候補したときの文句が『今の政界は、老害政治である。歳をとっても国会議員席にしがみついている老害を、国会から駆除しなければ世の中は良くならない。わたしには若さがあるわたしの若い感覚で、政界を一掃してみせる』と大見栄をきって当選したら」
 「したら・・・？」
 「いつまでたっても辞めないで、自分が老害の最たる者になっても、しがみついている、老成円熟とはほど遠い」
 「老成円熟って？」
 「歳を積（かさ）ねると練れてくる・・・。河上徹太郎という評論家が言っていた『人は歳とともに澄んでいくものである』ということだ」
 「すると」
 「いつまでもお山の大將でいたい、引き際の美学を忘れた天才といえなくもない」

今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。